

その21 間瀬銅山と村とのかかわり

■今月の「ふるさと再発見」シリーズ第二十一回目の今回は、明治期から大正期にかけて繁栄した間瀬銅山の様子についてご紹介しよう。

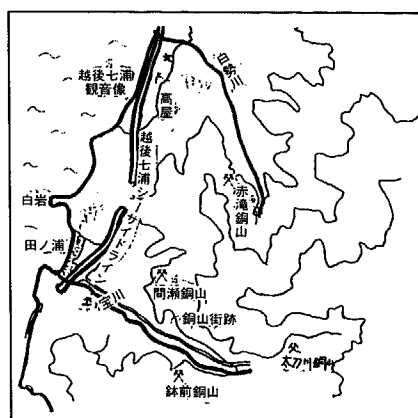
間瀬銅山は、享保元年（一七二〇）の記録によると、元禄十四年（一七二七）江戸から田辺善兵衛、清水八左衛門の兩人により、間瀬地区深ヶ沢「鍋割」で採掘されたのが始まりといわれています。当時の銅山採掘は小規模で行われていましたが、明治三十七年十一月に新潟の金融資本家白勢春三の手に経営権が移ってからは、その鉱山経営の姿も近代化が進み、大正元年から大正四年までの間が間瀬銅山の全盛期であったようです。



▲間瀬銅山跡に今も残る守護神

期には銅山事務所を中心とした飯場に約二百七十名くらいの人たちが住み、鉱山部落を形成していました。

最盛期の間瀬銅山は、第一、第二、第三、第五坑道が掘られており、その採掘方法は鉱床を探りながら坑道を掘り、適当な場所に採光場を作り、さらに鉱脈を探しその上部に採鉱場を作っては掘り進むという方法で行われ



▲間瀬地区にあった銅山配置図

ていました。これらの坑から、最盛期には月産約五十トンの銅石が産出され、その品質も良質で、田ノ浦海岸から汽船で主に佐渡相川鉱山へと搬出されていました。

このように銅山の盛況により、県内外の人たちが職を求め同地区へどっと流入し、特に大正四年から七年の間に集中しており、このことから、同時期が銅山経営の最盛期だったこともうかがえます。

●銅山が与えた村への影響
このように銅山の盛衰が、県内外の人たち

がどっと流入し、そしてさっと立ち去っていくという人口の増減のほかに、間瀬地区の他産業にも大きな影響を与えました。銅山盛況時には、銅山の人たちの消費のため食料や日用品の需要も急増し、関係者らは繁昌したといえます。それに無職者の多かった間瀬地区民にとっては、時に漁業の手伝いをしたり、時には銅山部落の物資運搬に雇われたり、また銅山に臨時雇用されたりと働き場を多くした銅山の役割は大きかったといわれています。



▲今や草木の陰にひっそりとたたずむ銅山跡地

それに、品位の良い間瀬銅は、燕の銅器製造業者の原料として使われ、それらは「スケゴウ」とよばれた間瀬の女の人たちの背によって船着場まで運ばれ、そこから海路新潟へ送られたものを取り寄せたり、樋曾地区の馬方が馬に八本くらい粗銅を積んで燕まで運んだものが使用されていました。このようなことから、当時は、間瀬の女たちや樋曾の馬方までがこの間瀬銅山で生活の糧を得ていたようです。

今回ご紹介した内容は、岩室村史から抜粋して掲載したもので、詳しくは村史をご覧ください。なお、岩室村史をご希望の方は役場総務課（一冊五千円）までご連絡ください。

路樹木の伐採にご協力ください

これから海水浴シーズンを迎えて、交通量がグーンと増えてきます。それに比例して交通事故の多発が予想されます。

ところで、村内を見渡すと路上に樹木や庭木がとびだし、通行の障害となつている箇所が多くみられます。そこで、交通事故を未然に防止するため、皆さんのご家庭で庭木などが路上へとびだしている場合は、伐採するなどして交通事故防止にご協力ください。



でも、線香花火にねずみ花火、皆さんも子どもも、花火で遊んだ楽しい思い出があるはずですよ。

楽しい花火遊び、薬取扱いには、火薬です。扱い方を間違えたと火事になったり、やけどを負ったりすることがあります。ですから、このような事故を防ぐためにも、親や大人がそばについてやってたり、子どもと一緒に遊びながら正しい扱い方を教えるようにしましょう。

